

# 赤米ニュース

## 第293号

(2021年8月31日)



## 東京赤米研究会

〒186-0005 東京都国立市西3-7-29 アゼリア国立2-101 長沢方 (Tel.042-577-6855)

8月の赤米作り-----	2340
おしらせ-----	2341
おたより-----	2344
国分寺市の稲作農具 (IV) -----	長沢利明 2344
表紙解説：江戸東京ゆかりの植物⑧—江戸朝顔— -----	2346

[2021 年版赤米栽培マニュアル]

## 8 月の赤米作り

### ● 8月の赤米作りのポイント

盛夏の季節となりました。ジリジリと照りつける真夏の太陽、いまや日中の最高気温 34～35℃は当たり前となってしまうすさまじい酷暑、そして本当に何とかしてもらいたいほどの連夜の熱帯夜地獄。東京の夏を乗り切るのは並大抵のことではありません。それは人間だけでなく赤米稲にとってもそうで、あまりに暑過ぎる夏は、稲にとってもつらいのです。植物は自ら動くことができませんので、より過ごしやすい環境を、人間が作ってやらなければいけません。そこで今回は、暑さ対策ということを少し考えてみることにしましょう。

また、この時期は赤米稲の背丈も、もうかなり大きくなっているはずですので、今後の台風襲来期に備えての風除け対策の強化ということも、忘れてはいけません。赤米の植物体の内部では、すでにこの頃、稲の花の幼体が形成されており、8月の赤米稲は、いわば妊娠初期の母親のようなもので、大事な時期を迎えています。大切にいたわってやりましょう。

### ● 酷暑対策と日除け

連日 30℃を越える日が続きますと、赤米の苗は一通りの分けつ活動を終えて、これ以降はぐんぐんと草丈を高く伸ばしていきます。8月の時点での草丈は約 80～90 cm、時には 120 cmを越すことも珍しくありません。通常の稲よりも、ずっとノッポなことに気づかれることでしょう。大昔の稲はこんな姿をして

いたんだよ、と子供たちには説明してあげて下さい。現在、農家で作られている稲は風倒を防ぎ、稲刈りをしやすくするために、長年の品種改良を通じて、あのように背丈の低い稲になっていったということなのです。

ところで、いかに稲が熱帯原産の植物であるとはいえ、過度な暑さはやはり苦手です。赤米稲の苗が真夏の強い陽射しを受け、茎や葉の周辺部分の気温が一気に上昇して、時に 35～40℃にもなることがあっても、決してへこたれることはありませんが、問題は土の温度です。ミニ田んぼの土中温度があまりに上昇し過ぎることは、決して好ましいことではなく、むしろ絶対にそうなることを避けるべきです。対策としては、段ボールなどで日除けを作り、バケツやプランターの回りを囲って、土の部分だけ直射日光が当たらないようにしてやるとよいでしょう。また、バケツやプランターを時々回したり、位置を動かして角度を変え、まんべんなく稲の地上部に日が当たるように配慮してみてください。

庭の土の上にバケツ稲を置く場合はあまり問題がありませんが、マンションのベランダやビルの屋上などでは床がコンクリート敷きになっているため、太陽光線の照り返しや熱伝導によって、異常な高温になることがよくあります。コンクリートの熱が直接、ミニ田んぼに伝わらないように、バケツやプランターの底に板や発泡スチロール片などをはさんで敷き、断熱材にするのもよい方法です。クーラーのファンから排気される熱風が、苗に直接当たったりするのもまずいことです。そういうことのないように気をつけることも大切で、室外機から極力離れた位置にミニ田んぼを置くようにしましょう。

## ●水の管理について

この時期のミニ田んぼの水位は、かなり深めの状態で維持しますが、水の腐敗や藻類(アオコ・アオミドロ)の発生には十分注意をして下さい。時折はまるごとそっくり水を換えてやって下さい。苗の成長が思わしくなかったり、急に元気を失ったり、葉がダラリとしおれたり、葉先が黄色くなって枯れかかったりした時は赤信号です。水や土が腐敗して根腐れを起こしている可能性がありますので、そういう時には短期間の「中干し」を時折やってみるとよいでしょう。「中干し」とは、ミニ田んぼの水をすべて抜いてしまい、土をできるだけ乾かして、地表面に太陽光線を十分あて、紫外線による殺菌をおこなうことをいいます。

本格的な水田稲作でも、盛夏から初秋にかけて急に稲が生育不良を起こすことがよくあり、農家ではこれを「秋落ち」と呼んでいます。多くの場合、土中でのガス発生による稲の根の損傷が、その原因といわれています。ガス抜きパイプの中が土で詰まっていないかということにも、つねに気をつけて下さい。

その他の対策としては、害虫と強風による被害への備えということになるでしょう。よく稲の葉を見て下さい。所々虫に食われた痕跡がありませんか？。小さな幼虫が茎に付着して体液を吸っていたりしませんか？。害虫は見つけしだい、徹底的に取り除いてひねりつぶして下さい。かなり深刻な事態におちいつている場合、殺虫剤の使用もためらってはいけません。台風もこれからの時季は、頻繁にやってきます。気象情報をよく見て、危なそうな日には、突風を受ける前に、ミニ田んぼを丸ごと屋内に移動させておきましょう。

出穂後の防風ネットの掛け方については、また次回に解説します。

赤米の茎をよくご覧になって下さい。一部分茎が膨れている所があります。指で軽くさわってみて下さい。そこにはもう稲穂の赤ちゃん(幼穂)がすでに宿っているのです。9月の声を聞くや否や、幼穂は急激に成長して茎のてっぺんから顔を出し、ただちに開花を始めます。赤米作りも、もう一步でゴールインです。ようやくここまでやってきました。今までの努力が報われるのは、もうすぐです。細心の注意を払いながら、最後の追い込みに入りましょう。

## おしらせ

### ●青梅市内で赤米プロジェクトの田植え

国分寺赤米プロジェクト(チーム赤米)では今年も青梅市内富岡地区に確保している水田数枚を用いて、大々的な赤米栽培をおこなっております。代表者である坂本浩史朗さんはこのほど、国分寺市内から青梅市内の現地へと自ら転居をされ、田んぼのそばに家を借りて住みつき、稲作一本に打ち込んでおられ



自然農方式での田植えがおこなわれました

田植え作業の合間に赤米ビールを手に「チーム赤米」のメンバーが勢揃いです（6月13日・青梅市内にて）。



るほどで、意気込みがあらわれています。本年6月13日（日）には、現地での盛大な田植えイベントがおこなわれ、チーム赤米のメンバー約20名が集まって、汗を流しました。

青梅市富岡地区の広い谷あいの低地域は、一面の水田地帯となっており、どこの農家でも田植えシーズンの最盛期を迎えていて、田んぼの周辺はとてにぎやかです。赤米プロジ

赤米ビールを自ら開栓される斯波さんです



これが赤米ビール「あめにうたえば」です



みんなで乾杯！午後の田植えも頑張ります！



エクトが借りているそれぞれの水田には苗代が作られ、青々とした元気な早苗がそこに育っています。こくぶんじ動物病院の大石岳人院長がそれを鋤で掘り起こし、一人で苗取り作業を担当しておられました。メンバーらは、その早苗の束をめいめいに受け取って、水田に移植していきますが、自然農方式なので田には水が張られておらず、また不耕起栽培なので、田を耕すということがまったくありません。雑草などもまったく除去されずに、そのまま生えています。もちろん大きく育った雑草は取り除き、そのまま田の中に伏せていくのですが、それと並行して鎌で硬い田の土をほじって穴を掘り、そこに早苗を植えつけていくのです。田に水が引かれるのは田植えの後で、その後の雑草の繁茂を抑制するために、田に水を満たすのだそうで、まことにユニークな栽培方法が採用されているのでした。

### ●赤米ビール開栓！

さて、今回のチーム赤米の田植えイベントの最大のお楽しみは、もちろん「赤米ビール」の初披露と呑み始めにあります。誰もがそれを楽しみにして、今日のイベントに集まっているのでした。「武蔵国分寺種赤米」を原料

に用い、「Kunitachi Brewery（東京都国立市東 3-17-28 草舎ビル 1 階）」の手で醸造された赤米ビールが、このほどついに完成し、メンバーらに振る舞われることになっているのです。初仕込みのビール・タンクはワゴン車に積み込まれて現地まで運ばれており、田植え作業に一区切りついた昼休みの休憩時に、皆で乾杯をおこなうことになりました。醸造責任者である斯波克幸さんの手で、記念すべきその開栓がおこなわれます。

新酒の開栓はこの日の同時刻に、国立市内の「せきや（東京都国立市中 1-9-30 せきやビル 1 階）」でもおこなわれることになっております。青梅市内と国立市内とで同時に、6月13日（日）正午をもって赤米ビールが開栓され、一般販売もスタートするという段取りなのでした。新商品の赤米ビールのブランド名は「あめにうたえば」と名づけられ、今後は国立市内の「せきや」や国分寺市内の「胡桃堂喫茶店」などに行けば、誰でも買うことができるようになります。

青梅市の赤米田んぼでは、さっそく赤米ビールの乾杯がおこなわれ、「おいしい！」の歓声が巻き起こりました。酸味の強いフレッシュでライト感覚のビールは誰にでもとても飲みやすく、大変に好評でした。

### ●国分寺五小で特別授業！

国分寺市立第五小学校（東京都国分寺市日吉町 1-30-5・橋本弥記校長）では昨年引き続き、今年も5年生2クラスを対象として本年7月12日（月）、赤米に関する特別授業がおこなわれました。授業を担当したのは、本会代表の長沢利明さんと、国分寺赤米会からも龍神瑞穂会長・前澤 宏さんを含む4名が出席されました。ご承知の通り、国分寺五小



五小校庭の赤米田んぼは順調です

では「総合」の授業の一環として、「武蔵国分寺種赤米」を児童らが育てる活動を実践中で、6月中には五小校庭での田植え、武蔵国分寺跡地での陸稲種まき作業などを、5年生2クラスで実施しました。今回の特別授業では、米と稲作の歴史と文化、赤米稲の特色などがわかりやすく解説され、活発な質問も出されて、授業時間がオーバーするほどでした。一方、五小校庭のビオトープ田んぼでは、児童らが植えた赤米稲がすくすくと育っており、すでに草高50cmを超えています(写真参照)。秋の収穫がとても楽しみです。

## おたより

### ●赤米は元気に育っています(高橋寿子)

『赤米ニュース』、いつも楽しみに拝見しております。マニュアルに従っていて、我が家の赤米は元気に育っております。「江戸東京ゆかりの植物」の写真は見事で、毎回楽しみです。七月号のセンナリホオズキは見たことがなく、浅草寺のホオズキ市の実情も、初めて知りました。二十歳の頃、日光へ行く道すがら立ち寄り、四万六千日の御利益を喜んだ

昔を思い出しました(7/13・東京都国分寺市)。

## 国分寺市の稲作農具(Ⅳ)

長沢 利明

### 2 耕起作業と農具・つづき

図5は、内藤新田の畑作用の鋤で、このように扁平な一枚刃の鋤を「平鋤(ひらぐわ・へらぐわ)」と呼ぶ。刃部の長さは250~380mmほど、幅は120~150mmほどで、軟鉄製の刃床部の先端に鋼を入れて鍛造した中型鋤であり、柄の長さは1200~1300mm台で、そう長くはない。フロ(風呂)と呼ばれる木製の台を用いず、鉄製の角櫃で刃床部と柄とを装着した、いわゆる「金平鋤(かねひらぐわ)」タイプの鋤である。こうした形式の鋤はもちろん新しい時代のもので、昭和時代戦後期に作られた鋤であろう。角櫃と刃床部とが一体的になっているこの種の鋤は現在、農協や農機具屋などで1本7000~10000円ほどで農家に売られている。

図6も内藤新田で見られた畑作用の鋤3点であるが、上段の平鋤は古いタイプの鋤で、刃部は分厚く、長さは540mmにも達し、柄は1050mmできわめて短く、かつ太い。とはいえ、刃床と柄との接合部には角櫃が用いられていて、その点は新しい構造となっている。畑の深耕のための重量性の平鋤を、古い形式のみ残して近代的な造りに改良したのものであろう。図中中段は刃部に孔がうがられた、いわゆる「窓鋤」タイプの平鋤なのであるが、窓はぐっと小さいうえに、柄との接合部に角櫃が用いられていて、もちろんこれも新しい時代のものである。下段は刃部が四本に枝分かかれをした「四本鋤(しほんぐわ)」で、国分寺市内

図2 熊手各種

注) 上段は榎戸新田 [長沢, 2020:p. 31]、下段は内藤新田のもの [米村, 2020 b :p. 33]。

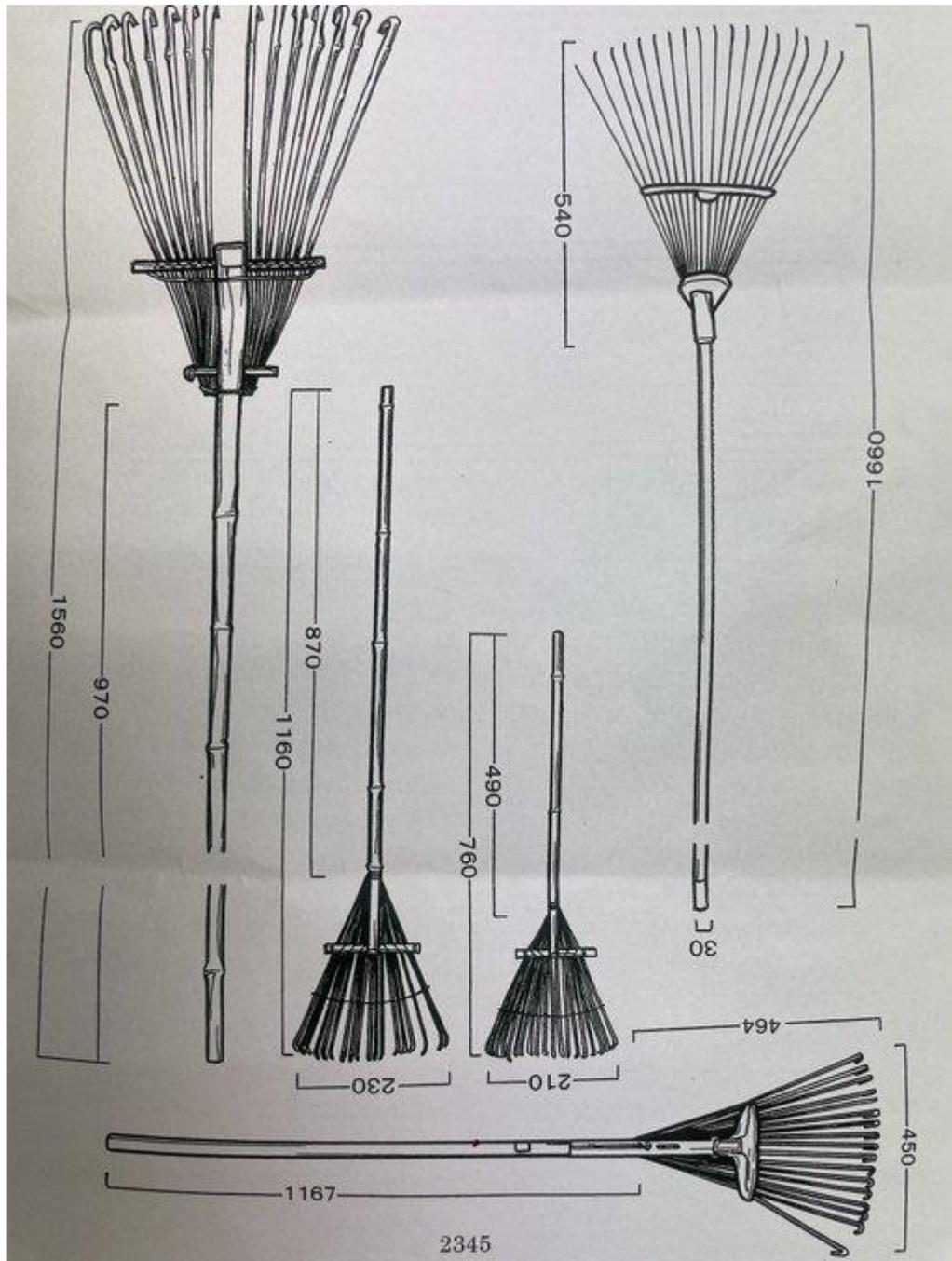
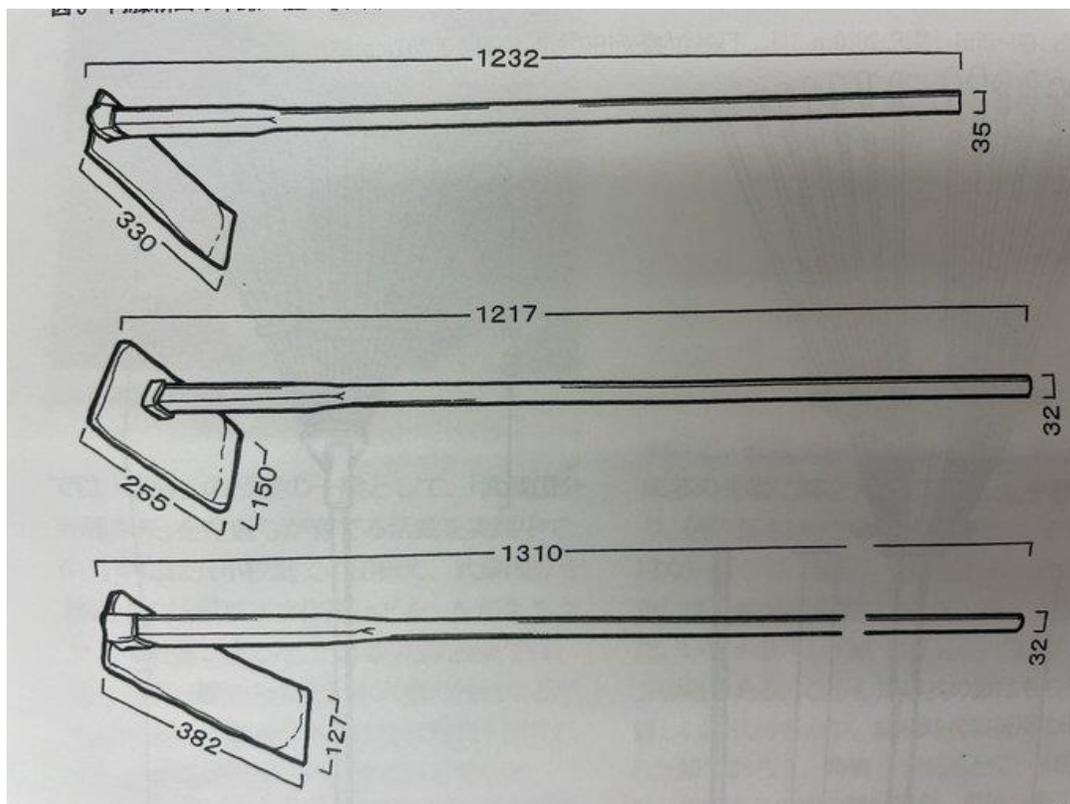


図5 内藤新田の平鍬 注) [米村, 2020b:p. 33]。



ではよくこれをマンノウ（万能）と称している。マンノウは田・畑両用の荒起し具であって、固結した土をざっくりと深く掘り起こし、切り返す作業に欠かせない鍬である。（つづく）

【表紙解説】

江戸東京ゆかりの植物⑧—江戸朝顔—

すがすがしい真夏の朝をいろどるのは、色とりどりの朝顔の花だ。生垣にからむその蔓は、時に井戸舎にまで巻きついて、「朝顔に釣瓶取られてもらい水」ということにもなる。奈良時代に薬用植物として中国から渡来した朝顔は、近世江戸で爆発的な栽培ブームをもたらし、何百という品種が作り出された。江戸で朝顔作りが大流行したのは、その第1期が文化～文政時代（1804～1829）、第2期が嘉永～安政時代（1848～1859）だ。花色でいえば赤・青・紫・黄色などが第1

期にもうすべて出そろっており、花の形でいえば獅子咲き・台咲き・縮み咲き・八重咲きなどが現れて、いわゆる「変わり朝顔」の類もいろいろ登場したのだが、明治維新後は大輪種が主流となった。写真ではいくつかの大輪咲きの花を集めてみたが、上の左寄りに見える茶色っぽい色の花が「団十郎」と呼ばれる品種で、歌舞伎役者の市川家のシンボル・カラーである柿色の花を咲かせる。地味ではあるが今でも絶大な人気があり、江戸っ子たちはカラフルさよりも渋さを好んだ。そこにこそ江戸の粋というものがあり、洗練された都会的なセンスがあらわれている。毎年7月6～8日に入谷鬼子母神（真源寺）で開催される朝顔市に行けば「団十郎」を見ることができるが、朝顔の鉢植えを売る市なので昼頃に訪れても、もう花はしおれている。朝顔市見物は早朝に行くべきものと決まっていたのだ。